

## 「哲学的共存」に関する考察

— 2歳児との会話の分析 —

## A Study in “Philosophical Co-Existence”

— An Analysis of Dialogues with A Two-Year-Old Child —

渡 邊 文  
Aya WATANABE

## 目 次

はじめに

1. この研究に至った経緯と目的
2. Philosophy for children Hawai'i (p4cHI)の目的と4つの柱となる概念
3. 「哲学的共存」とは
4. 研究の方法
5. データ分析
6. 議論：なぜこれらが「哲学的共存」なのか
7. 結論

## 1. この研究に至った経緯と目的

この研究は、筆者が2歳の娘との日々の生活の中で、母親として、人として、どのような変化、成長を経験しているのか、ということを書き記述するために始めたものである。まずはこの研究に至った理由と目的を説明する。

筆者は2012年より philosophy for children Hawai'i (以下よりp4cHIと略) という教育実践に関心を持ち、研究、実践を続けてきた。p4cHIは1960年代にアメリカの哲学者・教育者であったマシュー・リップマンが展開したPhilosophy for Children (以下よりP4Cと略) から派生した教育実践であり、1984年にハワイ大学哲学部のトーマス・ジャクソン博士と同僚、ハワイ州の教員や子どもたちが共に創り上げてきた取り組みである。p4cHIの実践では、多くの場合、子どもたちと教員が共に円になって座り、自由に問いを立て、問い合い、探究を深めると同時にコミュニティを形成することを目的としている。

2014年8月から2016年3月の間、筆者はUniversity of Hawai'i at Mānoa, Uehiro Academy for Philosophy and Ethics in Education (以下より、ハワイ大学上廣アカデミー) にて客員研究員として受け入れられ、p4cHIの実践に身を置いてきた。2017年8月から2021年7月までは同アカデミーにてアシスタント

を務め、日々、ハワイ州の小学校や高校の教員や子どもたちのp4cHIの実践の支援を行ってきた。そして2021年8月に帰国をし、同年10月から半年弱、宮城教育大学上廣倫理教育アカデミーにて教務補佐員を務め、2022年2月25日に娘が誕生するまでの間、p4cHIや宮城で行なわれる探究の対話<sup>1</sup>の実践に関わらせていただいた。

2022年2月25日に娘が誕生してから2024年4月に現在の職を得るまでは、自宅で育児、家事、リモートでできるアルバイトの日々を続け、p4cHIの実践とは縁遠い生活を続けてきた。その中で、時折、知人から、「p4cHIの実践は恋しくない？」などと訊ねられることがあった。この問いを受け、ハワイや宮城で一緒に活動を続けていた先生方や子どもたちが恋しい、と感じることはあっても、教室に入り、p4cHIの実践をすること自体を恋しいと思った経験があまり無いことに気が付いた。

改めてこの心情について振り返ってみると、筆者がp4cHIの実践に興味を持ち、積極的に実践に関わってきた目的は、探究を共にするコミュニティにおいて、他者の考えに耳を傾け、それらを自分の思考の糧とし、自分が生きる世界の中での新しい気づきや豊かさを得ることであった。その点で、妊娠をし、自分の身体の中で著しく成長をする自分とは異なる「他者」である娘を感じることは、探究的な経

験そのものであった。出産後、自分から身体的に切り離された一人の「他者」であり、日々変化を遂げる娘と共に生活することは、変化と新しい気づきや問いに満ちあふれたものである。そういった点で、p4cHIの実践に参加をすることで得られていた充実感を娘との生活の中で得ていたのだということを感じた。

その一方で、当然、毎日娘との日々を過ごす中で、仕事や家事等の忙しさに追われ、探究心や新しい気付きなどに気を配る余裕がない場面も多々存在する。その中でも、娘と過ごす時間に我が身を置き、母親として、一人の人間として探究をしながら娘との共存を楽しみ、信頼関係の構築を続けたいという動機はp4cHIの実践での学びが大きく影響していると考えられる。そこで、筆者は2歳の娘との会話を分析し、何かそこに特徴が見られるかどうか検証することにした。

この論文ではまず始めにp4cHIの概要と特徴を説明する。そして、その特徴の一つである「小文字の哲学 (little-p philosophy)」のアイデアを用いて、「哲学的共存」の定義を行う。その後、この研究の方法、データ分析、ディスカッションについて述べた後、結論で締めくくる。

## 2. philosophy for children Hawai'i (p4cHI) の目的と4つの柱となる概念

p4cHIの目的は、子どもたちの良い思考者としての能力を伸ばし、他者への思いやりと責任を持ってその能力を使えるようにすること<sup>2</sup>である。また、「良い思考」とは、認知能力を効果的に使い、意図や目的をもとに自分の考えをふりかえり、吟味する過程である<sup>3</sup>。

また、p4cHIはハワイという多文化に溢れる環境で、現地の学校の先生や子どもたちのニーズに対応することで発展してきたが、その過程でコミュニティ、探究、ふりかえり、てつがく、の4つの柱となる概念が成立した<sup>4</sup>。

### ① コミュニティ

p4cHIは、探究の参加者全員が安心することができ、知的に開かれた環境を作り出すことを重要視している。そのための一つの工夫として、一番初めの

探究では、「コミュニティボール」というツールを糸糸で作る。このボールを通じて、参加者は自分の思考を自由に表現することを促され、参加者全員の独自性と共感が育まれる。

さらに、ジャクソンはp4cHIのコミュニティが目指すべき知的安全性を次のように定義している。「コミュニティのすべての参加者は、コミュニティに参加する全員に対する尊重が守られている限り、どんな問いや意見でも表現をする自由を感じることができる」<sup>5</sup>。彼は、安全な環境を作り出すことが、参加者（学生も教師も含む）が自分自身の本物の驚異や気付きの感覚を表現し、コミュニティとして共に探究するために絶対に必要な条件なのである。

### ② 探究

p4cHIの活動の中心は「探究」である。参加者は自分の興味や問いを共有し、共に思考を深める。この問いは、参加者全員の日常の体験から出てくるものである。問いに対する答えを解明することよりも、共に考え続けることが重要であり、全員が平等に探究者として対話に貢献することが促される。

### ③ ふりかえり

ふりかえりはp4cHIにおいて二通りの意味がある。一つ目は、探究の対話の終わりに自分自身とコミュニティ全体の対話を評価することである。そしてもう一つは、日常生活において自己をふりかえる態度と習慣のことである。探究の対話の後、参加者は「聴くこと」、「話すこと」、「コミュニティの安全性」などを評価し、自分の対話への参加をふりかえる。また、対話の時間に限らず、日々の生活を吟味しながら生きることを促している。

### ④ 哲学

p4cHIでは、文化的に多様な背景を持つハワイの子どもたちや教員のニーズに応えるため、「哲学」という言葉の再定義を行なった。ジャクソンは「大文字のPの哲学 (Big-P Philosophy)」と「小文字のpの哲学 (little-p philosophy)」を区別した。大文字のPの哲学は伝統的な学問的哲学を指し、哲学者と呼ばれる人たちや大学の哲学部の講義やセミナー等で扱われる内容である。それに対してp4cHIの活動の中心となる小文字のpの哲学は、「(日々の) 自

分の信念や思想を、世界との相互作用の一部として捉え、それらをふりかえる過程」<sup>6</sup>である。この思考は日常生活の中で誰もが持っている「原初的な驚き (Primal Wonder)」から生まれるもので、すべての人が生まれたときから共通して持っている世界に対する「気付き」である。この「原初的な驚き」は人が文化や言語に慣れ、修得する以前から存在するもので、世界に対する「純粋な知覚」であり、同時に、世界に対する主観的な反応でもある。p4cHIでは、この小文字のpの哲学を大切に、誰もが哲学的な思考を育ていける環境を提供しようとしている。p4cHIは、文化的多様性を尊重し、共に学ぶコミュニティの形成を重視し、問いを深め、ふりかえりを通じて自己を省みることで、哲学的な思考を日常生活の中で育むことを目指している。

### 3. 「哲学的共存」とは

この論文において、筆者と娘が知覚を働かせ、お互いの存在を認知し、相互行為を行ない、思考する状態を「哲学的共存」としている。以下、この論文における「哲学的共存」の定義を「哲学」と「共存」に分けて説明する。

#### (1) 「哲学」とは

この研究における「哲学」の意味は上記に述べた「小文字のpの哲学」を依拠している。「哲学」とは「原初的な驚き (Primal Wonder)」をもとに、知覚と思考を通して自分が存在する世界との相互作用を行ない、新しい意味を創出する行為である。

#### (2) 「共存」とは

デジタル大辞泉によれば、「共存」とは「二つ以上のもものが同時に生存・存在すること」である。

#### (3) 「哲学的共存」とは

以上より、本論文において、「哲学的共存」を以下のように定義する。

**個人の観点：**自分と同じ空間、時間に存在する他者、動物、静物との相互作用を通して、考え、ふりかえり、新しい意味の創出へとつなげること。

**コミュニティ (共同体) としての観点：**お互いに聴

き、問い合い、共に考え続け、それぞれ新しい気付きや意味の創出を行ない、さらにそれをまた共有すること。

## 4. 研究の方法

### (1) 研究の問い

この研究の問いを以下のように定め、研究方法と分析方法を決定した。

- ① 母親として、人として、筆者は自分の娘である2歳児との会話、対話を通してどのような影響、学びを得ているのだろうか。
- ② 出産前に深く関わっていたp4cHIの実践は自分の子どもとの関わりの中にどのように活かしているのだろうか。

### (2) 研究の方法

以上の問いを明らかにするため、以下のように研究と分析の手続きをとった。

- ① データ収集：一週間、毎日30分程度、娘と自分が一緒にいる場面の録音をする。そして、自分と娘が言葉を発している場面の文字起こしをする。
- ② データ分析：現象学的アプローチを用いて文字起こしデータを読み取り、読み取ったデータを整理しながら浮かび上がってくるテーマを挙げる。
- ③ 浮上したテーマについて、p4cHIで扱われる概念を参照しながら考察を行なう。

また、この研究は会話分析を行なって母子の心理的調査を行なうものではなく、母子の会話が母親である筆者にとってどのような影響を与えているのか、ということに焦点を当てている。

## 5. データ分析

### (1) 想像的/創造的会話の発生

文字起こしデータから捉えられた一つ目のテーマは「創造的/想像的対話」である。このテーマが創出された母子の会話の記録の一例を紹介する。(M：母親 C：娘)

M1：今日は何をしたの？ (事実を確認する質問)

C1：先生と、たくみくんにお茶をあげたの。

M2：先生とたくみくんにお茶あげたの？ (事実を

確認する質問)

C2: 先生にもお茶あげたんだよ!

M3: 先生とたくみくんお茶喜んでた? (事実を確認する質問)

C3: 喜んでた!

M4: 何色のお茶あげたの? (事実を確認する質問)

C4: えっとね、白だよ

M5: どんな味するの? 白いお茶。(事実を聞く質問)

C5: あのね、あのね、イチゴの味するの。

M6: ひかりちゃん飲んだことあるの? (事実を聞く質問)

C6: 飲んだことないよ。

M7: 飲んだことないのに先生とたくみくんにあげちゃったの? (倫理的、規範的質問)

C7: (無言)

この会話の母親の経験に関する特徴についてまとめる。

- ① 母親の問いかけは事実の確認をするものであり、娘の実際の経験を明らかにしようとするものである。
- ② 事実を確認する質問に対して、娘が事実とは関係なく、想像をして回答を創造したと思われる回答を始める。(M4, C4, M5, C5)
- ③ 娘の想像的、創造的な発言を聴き、疑問に思いながらも、頭の中で娘が思い描いている状況を想像する。
- ④ 娘の想像の世界を自分でも想像することで、娘の想像を追体験する。
- ⑤ 返ってきた返答を元に問いかけ続け、会話を続け、相手の生きる世界を想像し、追体験をすることで、娘との哲学的共存が成立する。
- ⑥ しかし、娘にとって抽象的過ぎる、または興味を持つことができない問いかけに対しては返答が無くなる。ここで哲学的共存は途切れる (M7, C7)

## (2) 事実に即した対話

2つ目に浮上したテーマは「事実に即した対話」である。

M1: おうち帰って味噌汁作ろう

C1: ママどこに行くの?

M2: おうちに帰って味噌汁を作るよ

C2: チョコレートは?

M3: チョコレートお家にあるよ

M4: 今日、給食なんだった?

C3: 給食は、、、ママ考えて!

M5: ええええ、ママが考えるの? 何だろ、牛乳?

C4: 牛乳!

M6: と、今日はちゅるちゅる(麺類)だった?

C5: うん、ちゅるちゅるだった。

M7: ちゅるちゅるに何が入ってたの?

C6: じゃないよ、ごはんだよ

M8: あ、ごはんだったの?!

M9: ご飯と何?

C7: ご飯と卵とにんじん! (お月見ごはん)

M10: にんじん食べられたの?

C8: 食べられた!

この会話の特徴は以下の通りである。

- ① 娘からの事実を確認する質問に対する応答をする。
- ② この会話が始まる以前にしていた約束についての確認。(C2, M3)
- ③ 普段の会話の中で、娘から自分で考えるように促されることへの驚きを感じる。(C3, M5)
- ④ 自分で考えるように促され、常に慣例を元に物事を判断している自分への気付きを得る。
- ⑤ 娘が実際の自分の記憶を辿り、母親との会話に意味を見出していることへの気付きを得る。(C6, C7)

## 6. 議論: なぜこれらが「哲学的共存」なのか

先に述べたとおり、「哲学的共存」とは自分と同じ空間、時間に存在する他者との相互作用を通して考え、ふりかえり、新しい意味を創出することである。この定義を元に、上記の母子の相互作用がどのように「哲学的共存」であるのかを検討する。

### (1) 想像的/創造的会話

- ① 「**原初的な驚き (Primal Wonder)**」を取り戻す  
まず一つ目に分類される想像的/創造的会話によ

る母親の経験は、世界への驚き、感動、問いを取り戻すということである。創造的/創造的会話における母親の問いかけは事実確認が続くものであるのに対し、娘が返す言葉は娘が自分の想像力を働かせた結果であり、母親の単調な思考に対して、「それは一体何なのだろう？ どういうことなのだろう？」と言った驚きや、想像し、考えることの楽しさを思い出させるものである。また、事実とは距離のある娘から提供された想像の内容は、母親を既存の概念から逸脱させ、娘の想像世界を追体験させる。「原初的な驚き（Primal Wonder）は人々が学校に通うなどして社会化され、大人になるにつれ、失われがちであり、その結果、幼い頃に持っていた柔軟な思考は固まってしまうがちである<sup>7</sup>。母親の問いかけが既知の事実に基づいたものに偏りがちとなるのはその影響でもあると考えられるが、それに対してまだ新しい存在である2歳児の想像の世界に出会うことで、世界への純粋な驚きと喜びの感覚を呼び戻し、日常の固まった思考から解放されるのである。

母親と娘が共に新しい気付きや視点を共有し合うことは、さらに広がる相互作用を生み、他者や共同体に対する理解や意識を育むものであり、創造的な体験が新たな意味の創出や共有へと繋がっていくのである。

## ②「哲学的共存」の限界

しかし娘と母の「哲学的共存」が生じている場面は対話が途切れることで終了する。母親の問いかけに娘が反応しないことで、相互作用は滞り、母と娘はそれぞれの切り離された存在へと戻っていく。切り離された存在でいることが決して否定的であるわけではなく、再び会話が生じ、それによって新しい意味の創出が行なわれることによって「哲学的共存」が復活する。

想像的/創造的会話のM7の母親の問いかけには娘は反応を示さなかった。これは娘にとって問いかけの意味がわからなかった、または問いかけ自体に興味を持てていなかった結果である。それ以前の母親の問いかけは全て純粋に娘の経験を探る者であったのに対して、M7の問いかけは母親自身の価値観「自分が飲んだことのない、おいしいかどうかわからないものを他者に提供することへの疑問」が前提となっている。この問いかけに娘が興味を示さなかった訳であるが、それは母親が前提のない問いかけ

けをすることができていなかったからであると予想する。

p4cHIでは鈴木俊隆の「初心者の心<sup>8</sup>」を学びを得る際の心の状態として参照している。「初心者の心は空っぽであり、専門家の習慣にとらわれることなく、受け入れる準備ができており、疑いを持ち、あらゆる可能性に対して開かれている。」ここで言う「初心者」とは、過去の知識に基づく前提や判断なしに、あらゆる考えや意見を聞くことができる人のことを指し、そうした人はさまざまな学びの機会を得ることができるということである。

先にも述べたように、母親と娘の「哲学的共存」が終了し、別々の存在へと戻っていくことに否定的である必要は全く無いのだが、M7の母親の問いかけのあとに娘が反応を示さなかったのは、母親側が「初心者の心」から一歩かけ離れ、自分の価値観を元に問いかけをしたことによる。世界への純粋な驚きと喜びを自らつくり出す娘にとて、大人の価値観に占有された問いかけは応じるに値しなかったのである。

## （2）事実在即した会話

事実在即した会話は、日常の具体的な事実確認、ふりかえりに基づいて進行する。さらに、この会話では娘からの問いかけを受けることで、一方的な質疑応答の会話ではなく、双方がお互いの反応に意味を見出す対話へと変化している。例えば、この会話では、娘の発話に母親との会話を成立させるための思考の様子を伺うことができ、母親が驚かされる場面が多い。母親が「給食は何だった？」と質問する場面では、娘が「ママ考えて！」と母親が自分で考えるよう促す返答をしており、普段の娘との会話に異なるパターンが生まれてきていることに気付かされる。この反応には娘が母親との会話に思考を通して貢献していることが示されており、単純な事実確認の会話から、問い合うことでお互いの思考を深める対話の要素が表出している。

また、M6からC7のやりとりでは、一度母親の問いに対して応答したものの、娘が記憶を辿り、自分の答えを修正している様子から、母親との会話に娘が思考を通して参加していることが観察できる。こうした会話を通じて、娘は自分の記憶と母親とのコミュニケーションを通じて事実に基づいた世界を構

築し、母親もまたその視点に触れ、自分の思考の幅を広げている。

この会話に見られるのは、一方的な母親からの問いかけから始まる会話ではなく、母娘双方向が互いに聴き合い、問いかけ合い、意味を見出すことで対話を創ろうとする活動である。この結果、対話を成立させるための責任が母親から娘と共有されており、母親と娘の関係性から、対話を共に創り上げる人と人が共存していると言える。

## 7. 結論

先にも述べたように、この研究を始めた理由は、娘と過ごす日々の生活において、自分が母親として、人としてどのような経験を得ており、どのように娘との関係性を築いているのかということをも明らかにするためであった。娘と共に過ごす時間は、母親にとって世界への純粋な驚きや喜びを思い出させ、新しい意味を創造し、経験を拡張するものである。さらに、事実即した会話で示されたように、娘が母親との会話内で思考をしてその会話の成立への責任を担っていることから、その会話が発生している間は母と娘の関係を越えて、会話を成立させる二人の対等な人間同士として共存することになった。

これらの経験から導かれる結論は、子どもとの会話と対話についてふりかえり、吟味をしてみることは、会話の最中では気付くことができない娘との関係性や会話そのものの意味深さが示される。

Introduction for Philosophers and Teachers. Sara Goering, Nicholas J. Shudak and Thomas E. Waterberg Eds. 2013. pp. 99-109.

<sup>5</sup> Thomas Jackson, Gently Socratic Dialogue. 2017. <https://p4chawaii.org/wp-content/uploads/Gently-Socratic-NEW.pdf>

<sup>6</sup> 渡邊文人の相互作用と経験によって創られる対話 - p4cHawaiiにおける理論の検討 - 対話的教育論の探究. 田中伸, 豊田光世 編. 東京大学出版会, 2023, p.87.

<sup>7</sup> Thomas Jackson. Primal Wonder. 2019. [https://d3n8a8pro7vhmx.cloudfront.net/p4chawaii/pages/15/attachments/original/1563220029/Jackson\\_Primal\\_Wonder\\_7\\_2019.pdf?1563220029](https://d3n8a8pro7vhmx.cloudfront.net/p4chawaii/pages/15/attachments/original/1563220029/Jackson_Primal_Wonder_7_2019.pdf?1563220029)

<sup>8</sup> Shunryu Suzuki. *Zen Mind and Beginner's Mind*. 1970. Weatherhill.

---

## 註

<sup>1</sup> p4cみやぎ出版企画委員会. 子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」. 野澤令照 編. 2017. 東京書籍.

<sup>2</sup> 渡邊文人の相互作用と経験によって創られる対話 - p4cHawaiiにおける理論の検討 - 対話的教育論の探究. 田中伸, 豊田光世 編. 東京大学出版会, 2023, pp.89-109.

<sup>3</sup> Thomas Yos, Raising the Bar: Love, the Community of Inquiry, and the Flourishing Life. *Educational Perspectives*. 2012, 44, pp. 52-57.

<sup>4</sup> Thomas Jackson, Philosophical Rules of Engagement. *Philosophy in Schools* An